
遊戯(ゲーム)の終わり

こぬか雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゲーム
遊戯の終わり

【Nコード】

N9042F

【作者名】

こぬか雨

【あらすじ】

自分の力、そしてルチフェルについての記憶を失った海育。そんな彼女に、友人である舞が持ちかけた相談とは……？ 『変革の遊戯』の続きにあたります。そちらを読んでから読んでください。

図書委員長——というより図書館の主である神崎海音は、図書館で本を読んでいた。ミステリー専門の新人賞であるミステリー大賞を受賞した作品だ。作者は鵜飼沢浩一^{うかいざわこういち}で、題名は『鬼神の瞳』——その名の通り、『鬼神の瞳』が事件の鍵を握っている。舞台は何の変哲もない県立高校で、『鬼神の瞳』というのは演劇部が文化祭で演じる劇の題名だ。

(……面白い)

題材ははつきり言っておりきたりだ。しかし文章にはかなり引き込まれる。海音の読むスピードは自然に上がっていった。

(犯人は誰だろう……?)

探偵よりも早く犯人を突き止めることもしばしばだが、今回は難しい。誰もが怪しいのだ。もちろんそういう書き方をしているから、上手いミステリーなのだが。

海音がまるでかじりつくように『鬼神の瞳』を読んでいると、図書館のドアが開いた。気にせず海音は読書を続けるが、急に抱きつかれたせいで本を落としてしまった。

「私の読書を邪魔したわね……」

「ごめんごめん」

全く悪びれていない友人・鵜飼沢舞^{うかいざわまい}の謝罪を聞きながら、海音は本に栞を——以前拾った黒い羽根を挟む。ちょうどきりのいいところまで読み終わっていたので、落としても大惨事にはならなかったのだ。

「……で、何の用？」

「海ちゃんに脚本を書いてほしいの」

舞は演劇部の部長だ。おそらく来年度の文化祭用の劇に何をやる

のか考えているのだろう。実際のところ、演劇部のシーズンは、新人生が何人入るかもわからない冬から始まるのだ。以前、海音が脚本を書いた舞台が大成したから、もう一度——と考えているのだろうということもわかる。しかし海音は冷たく返した。

「もう書かないって言ったでしょ？ 小説は書かないって親に約束したんだから」

「小説と脚本は違うわよ。それに……どうしても海ちゃんがいって伯父さんが……」

「……伯父さん？」

舞の伯父は医者をしていたが、体調を崩して引退したと以前聞いたことがある。しかしそれと自分は結びつかない。第一会ったこともない。

「伯父さんはね、体調崩してから一念発起して小説書き始めたのよ。で、演劇部を舞台にしたいからって色々取材されちゃって……海ちゃんの脚本見せちゃった。そうしたらすぐ気に入っちゃって……」

「そう。でも、悪いけど……」

「伯父さんは海ちゃんは今読んでる本の作者なのよ。で、脚本化して欲しいのもその本なの。それでも駄目？」

「——は？」

冗談だと思った。しかし表紙をまじまじと見てみると、確かに『鵜飼沢浩一』と書いてある。裏表紙にある経歴も舞の伯父と一致している。

「——確かに鵜飼沢浩一が舞の伯父さんだつてのは本当みたいね。

鵜飼沢なんて珍しい苗字だし……でもそれなら、舞の伯父さんが脚本書けばいいじゃない」

「……原作者とは違う解釈が加わると面白って伯父さんが」

魅力的な話だ。こんな面白い話の脚本を書けるなんてとても名誉なことだ。自分が書いたものが舞台で形になるのを見るのも楽しい。しかし——

「親が何て言うか……」

「じゃあ……海ちゃんの名前は出さないで、私と伯父さんが書いたことにするから！ どうせ大道具とかは私が手を入れることになるし、伯父さんにもいいかどうか見せることになるし……ね？」

好奇心と欲求が、親との約束より勝ってしまう。勉強している振りをすればいくらでもごまかせるかもしれない。それに、原作がある分楽といえば楽だ。

「私の名前は一切出さないで。それならやる。あと、親に見つかりたくないから推敲は出来ないけど……それでいい？」

「もちろん！ 海ちゃんが書いてくれるなら、そのくらいはするよ」「何日で仕上げればいい？」

「舞台はまだ先だから、一ヶ月くらいでいいよ」

一ヶ月——親に気付かれないためには、制作には三日くらいしかかけられないだろう。構想を練る時間をたっぷり取り、一気に書き上げるのがいいだろう。

「一ヶ月ね。じゃあ私は早速読むから、じゃあね」

「つれないなあ……」

舞はひらひらと手を振り、本を読み始めた海音に不満げに呟く。しかし相手にされないことはわかってるので、とぼとぼと、しかし軽い足取りで図書館を出て行った。

+++

「また人間の観察う？」

人間界を映す鏡を見ていると、下級魔族のフィーが後ろから抱きついて来た。彼女はまだ若い、というか子供の淫魔だ。最近の魔族らしく敬語は使えない。ルチフェルは溜息をついた。

「せめて丁寧語くらい使え、フィー。ルチフェル様に失礼だろう」「ルチフェルの代わりにユリウスが寝る。しかしフィーはとんでもないことを言っただけだ。」

「『ていねい』ってなあに？」

「……です・ますを語尾に付けるんだ」

「ルチフェル様、また人間の観察ますう？」

フィーは敬語が使えるか使えないかの前に、馬鹿らしい。いくらフィーが魔界で一番若くても、これは由々しき事態だ。

「下級魔族の学校でも作るうか……」

ルチフェルは鏡を見ながら呟いた。そこには鵜飼沢舞と話をして
いる海音が映っている。『学校』という言葉は、それを見ていたか
ら出た言葉に他ならなかった。ルチフェルは鏡に映る海音に、優し
く触れた。

フィーが鏡を覗き込みながら、紫の髪をルチフェルの腕に巻きつ
ける。フィーも淫魔としての力だけは一人前らしい。

「ねえ、ルチフェル様あ！ 人間ばっか見てないでフィーと遊んで
よおです！」

髪が巻きついたところから精気が吸い取られていく。しかしフィ
ーのレベルでは、ルチフェルに何の影響もない。だが本来淫魔は人
間の精気を吸い取らなければならないのだ。ルチフェルは深々と息
を吐いた。

「……ユリウス。フィーに敬語と人間の精気の美味しさを教えてや
れ」

「承りました、ルチフェル様」

ユリウスは乱暴にフィーをルチフェルから引きはがし、隣室に連
れていった。叫び声が聞こえてくるが、いつものことなので気には
しない。

ようやく静かになってから、ルチフェルは再び海音を見た。既に
読書に没頭している。しかもいつもよりも読むスピードが速い。

「……これは、まずいかもしれないな」

このスピードのときは、たいてい読んだものを具現化する力を発
動させてしまう。しかも今の彼女は、そんな力を自分が持っている
ことすら忘れさせられている。ルチフェルは唇を嚙んだ。自分は万
魔殿の主だからこそ、動きが制約されている。海音が危険に巻き込

まれてしまっても、召喚の言葉がなければ人間界には行けないのだ。
「厄介なことを起こさなければいいが……」

世界に飽いた神は、海音という駒でゲームをしているのだ。それは阻止しなければならない。そしてそれ以上に、今は海音を堕としたい。この前の行為は、ルチフェルにも甘やかな熱を残していた。

+++

「これを一時間……難しいわね」

『鬼神の瞳』を読み終わった海音は、小さく呟いた。普通にこのまま脚本化すれば、三時間はかかる。だが上演時間は一時間だ。あの程度登場人物は削らなければならないかもしれない。

「まず、絶対入れなきゃいけない人をチェックしようかね」

海音はノートとシャープペンシルを出し、風のような速さで登場人物を書き始めた。王道のミステリーだからこそ、元々人物に無駄はない。削るとすれば、誰かの役割を誰かに被せる必要がある。海音は書き出した登場人物の隣に、現在の演劇部のメンバーを書いた。「やっぱり舞は部長役だな……性格似てるし。後は……この役は難しいから副部長あたりが打倒ね。最初は色素の薄い美少年……誰かいたっけ？」

配役を決めながら、人物を厳選していく。主要人物を十人から七人へ——これが限界だ。後は話を削らなくてはならない。

「減った三人のシーンは削る……でもって第一の事件——これはセンセーショナルに……第二は最初よりはあっさりで行くしかないわね。最初が肝心だし」

話にも少々手を加えなければならない。海音は再び本を手にとった。自分のものにするまで熟読するつもりなのだ。見ながら書いていくより、その方がいい。

劇中劇である『鬼神の瞳』の中に出て来る地域に伝わる童歌の通りに、人が危害を加えられ殺されていく——どことなく横溝正

史のような雰囲気漂っている、と海音は思った。ならば、金田一シリーズの脚本なんかは参考になるかもしれない。さすがにあれも、一時間では纏めていないが。

一つ、日輪ひのわをくぐったら

人の子乾いた、水あげよ

二つ、蓋あけのぞいたら

降る雪しんしん、溶かしましょ

三つ、蜜塗り朝待てば

蜜柑が揺れてる、おろしましょ

四つ、夜には鬼が来て

良い子悪い子、みな食べる――

「うーん……難しいなあ……」

話を簡略化する必要があるが、そうすると面白くない。いつそオリジナルの登場人物を出して――海音はそう考えながら、本に黒い羽根を挟んだ。そろそろ舞の部活が終わる時間だ。オリジナルの人物を出してもいいか、聞いてみよう。

海音は本を鞆にしまい、図書館を出た。童歌の続きを、無意識に口ずさみながら――

五つ、いつもの道行けば

いついつ出会う、帰りましょ

六つ、木槿むくげの木の下で

昔の話を、聞きましょ

七つ、泣く泣く床につき

菜種の油を、点しましょ

八つ、やうやう光が消えるまで

ややさん川の字、眠りましょ――

校門のところで舞を待っていると、騒々しい声が聞こえて来た。確認しなくてもわかる。これは舞だ。

「海ちゃん！」

勢いよく抱きつかれ、バランスを崩す。自然、舞は海音に馬乗りになった形になってしまう。

「……GLですか、部長？」

演劇部の一年生——確か名前は不動——が笑いながら横を通り過ぎる。色素の薄い茶色い髪に、雪のような肌——海音はそれをじっと見つめた。そして、不動を呼び止める。

「……君、最初の被害者にしていい？」

「ちよっ……海ちゃん？」

「一人目の役つてことですか？ いいですよ」

見た目は完璧だ。もしかしたら鵜飼沢浩一は、彼をモデルに書いたのかもしれない。不動は美しいが、どこか不敵な笑みを浮かべながら言う。

「じゃあ、脚本頑張つて下さいね。あと、部長とのアレコレも」

「そんな関係じゃないから！」

不動は海音の叫びも聞かずに、夜の中に消えていった。舞は相変わらず海音を押し倒したまま首を傾げる。

「私とのアレコレって何？」

「……知らなくていい。ていうかささときなさいよ」

「うわあっ！ ごめんね！」

こんなド天然——というか馬鹿がタチなわけないだろう。海音は心の中で不動に文句を言いながら立ち上がった。役に入ってしまった舞は天才的だが、普段はどこか抜けている。それは『鬼神の瞳』に出て来る部長も同じだった。

海音と舞は歩道を歩きながら、話を続ける。

「オリキヤラ？ 伯父さんは『出さなきゃ一時間には出来ないだろう』って言ってたから、出していいと思うよ。……ていうか、海ち

「やんは不動を第一の被害者に選んだのね」

「見た目の問題だね。演技力はどうなの？」

「不動は上手いよ。わりとどの役にもすんなり馴染むし」

それなら問題はない。海音は頭で構成を練りながら、歩を進めた。オリジナルのキャラクターをどう話に絡ませるか——ワトソン役なら、探偵役の副部長の相手役という王道パターンも考えられる。文化祭の劇は、そのくらい単純なほうがいいかもしれない。セツトもあまりお金はかけられないし——部員達の演技力で魅せるほかはない。

「——舞。明日演劇部に顔出していい？ 配役を決めた方が多分書きやすいから」

「大歓迎だよ！ いつそ入って！」

「あいにくだけど、演技は無理よ」

だよねえ、と舞は溜息をつく。演技をしたのは学芸会くらいのものだが、海音は声を張るのが苦手なために、木の役くらいしか貰ったことはない。その点は舞も同じだったが、舞は中学のときにそれを克服した。

「ねえ、舞。小説だと結構人死んじゃうけどさ……私はあまり殺したくない。あれが現実だったらあまりにも救われない結末よ。まあ、小説としてはかなり面白かったけどね」

「海ちゃんって、小説は小説って結構割り切るタイプだね。演劇になるとやっぱり現実になくなっちゃう？」

「とうるか……知り合いが演じるわけだからね。アンタが死ぬシーン想像したら何か腹立ってきたのよ。だから結末も変える。それでいいか伯父さんに聞いておいて」

「りょーかい。——まあ、確かにあの結末は文化祭っぽくないかも世の中は実際あんな感じだろうけどね」

一度道を踏み外せば、もう救いはない。それはまるで、一度の驕りで地に落とされた堕天使の扱いにも似ている。海音は息を吐いた。「とりあえず、不動少年ならびに他の部員達の演技力を見せてもら

うわ。それで結末を決めることにする」

「うん。期待してるよ、海ちゃん」

+++

次の日、授業が終わるとすぐに、海音は演劇部の部室に連れていかれた。部室は確かに広いが、大きな姿見、マット、その他木材、フットライトがごろごろ転がる雑然とした空間だ。

「おはようございます、部長、神崎先輩！」

「もう四時だけど」

運動部並の挨拶をしてきたのは、一年の男だ。何かいい役はないかと海音はそれを見ながら静かに考える。この純朴さは、助手役には似合いかもしれない。探偵役は副部長で、こちらは女だから——やろうと思えば恋愛にも持ち込める。

海音は、やたら体育会系なその少年が進める椅子に腰掛けた。舞はその隣の木材に腰を下ろす。

「——舞、裏方は何人くらい必要？」

「ライトは最低フット、スポット、舞台の三人。音響と大道具は来年度の新入生をあてるから、考えなくてもいいわ」

「わかった」

海音はノートを取り出して、部員の行動を観察する。誰がどの役につくべきか——舞はそれを笑いながら見て、床に仰向けに寝転んで足を三十センチくらい上げた。これはかなりつらい腹筋の一つだ。運動部用のもではなく、演劇や合唱のためのものだが。海音はしかし、そんな舞に話し掛ける。

「……不動少年は？」

「うーん……いつもは一番に来るんだけどなあ……」

舞はわずかに顔をしかめながら答えた。腹筋中に話すのは、わりとつらいものがあるのだ。しかし、舞はそのまま先程の体育会系に声を掛けた。

「ねえマックス、不動は？」

「今日五時間目からサボったんですよ、アイツ。でも部活には顔出すって言ってたはずなんですけど」

体育会系のニックネームはマックスというらしい。海音はシャーパーンを回しながら思案した。今日の一番の目的は不動が本当に適役か見極めるためだ。いないのなら明日にしようかとも考える。

（まあ、少し待ってみるかな……）

海音はそう思って、本を開いた。舞は時計を見ながら「そろそろ時間かな」と呟いた。今日は海音が来るから、基礎練習の時間は後に回してくれる。

「みんな、時間だから集合して」

「はい！」

口々に返事をして、舞の周囲に集まる。舞は溜息をついて腕を組んだ。

「不動以外全員いるわね。海ちゃん、どうする？」

「とりあえず何か練習用の台本読みでもやってみてよ。それ見てから考える」

「うん、わかった。じゃあ昨日副部長作って来た台本やろうか。あれなら全員同じくらい台詞あるし。海ちゃんも台本見る？」

海音は黙って頷いた。舞はわざわざ「じゃあ準備室に行ってくるね」と言って、部室の隣の準備室——実際にはただの狭い物置——に向かった。他の部員はそれぞれ台本を準備している。

——しかし準備室から舞の叫びが聞こえ、部室の和やかな空気が凍りついた。

「何があつたの、舞！？」

海音は誰よりも早く準備室のドアを開ける。他の部員もぞろぞろとそれに続いた。

「海ちゃん！ 大変なの……」

舞が示す方には、ぐったりと倒れた不動がいた。海音は慌てながらもマックスに指示を出す。

「先生呼んで来て！ あと救急車！」

「わ……わかりました！」

海音はそして、狼狽している舞に近づき、不動の額に手を触れた。熱い。それも普通に熱があるという次元ではない。

「海ちゃん……」

「これだけ体温が高いのに汗をかいていないのはおかしい。もしかしたら脱水症状かも……経口補水塩と、体を冷やすものを用意して」「ケイコウホスイエン？」

「あー……スポーツドリンクでいいわ」

「わかった。私はスポーツドリンク買ってくるから、副部長は保冷剤持ってきて」

二人がいなくなった部屋に、四人がかりで不動を運ぶ。海音は広い空間の中央に寝かせた不動の頬を軽く叩く。不動の目が薄く開き、ヘーゼル色の瞳が虚ろに海音を見た。

「海ちゃん、買ってきたよ！」

「早く飲ませて」

海音は不動の体を起こしながら、息を切らしている舞に言う。舞は頷き、スポーツドリンクを不動に飲ませた。その直後に副部長と保健医が部屋に入ってくる。

それから後は、全員保健医の指示に従い不動の体を冷やした。その数分後に救急車がようやく到着し、不動は病院に運ばれた。その姿が見えなくなってから、海音は地面にへたり込んだ。

「すごいね、海ちゃんは……しっかりしてる」

「——しっかりなんかしてない。舞だって……気付いたでしょう？」

本に——『鬼神の瞳』に書いてあるのと、全く同じ症状だったから対応出来たのだ。しかも不動にあてようと思った、一人目の被害者のものと同じだったのだ。この一致は、偶然とは思えない。

海音が黙っていると、舞は部員を解散させた。この状態で部活は

出来ない判断したのだろう。

全ての部員を見送った後、舞は海音の隣にゆっくりと腰掛けた。

「海ちゃん……？」

「この季節に、脱水症状になるなんてありえない……故意とは思えない。でも小説じゃないんだから、不動本人がやったわけではないし……だとしたら、誰が……」

「……そういうのは、海ちゃんが考えることじゃないよ。海ちゃんはただの人間なんだからさ。そういうことは大人に任せればいいのね？」

「うん……」

——しかし、そういうわけにはいかなかったのだ。

不動が倒れた次の日の夜、珍しく海音の携帯電話が鳴った。舞からだ——……嫌な予感がする。

「もしもし」

《海ちゃん……》

舞の声は震えている。海音は携帯をにぎりしめながら、低い声で言った。

「——どうしたの？」

《マックスが……学校の融雪槽の中に落ちて……し、死んじゃ……！》

「え……！？」

《どうしよう、海ちゃん……これじゃああの本と同じだよ……》

海音は何も言うことが出来なかった。海音もまた舞と同じことを思っていたからだ。

小説では、犯人は一人目の少年だった。しかし不動はそんなことをするような人ではない。そして不運な事故が二つ重なる確率は低い。

「とりあえず、他の部員達に気をつけるように言いな。それから……」

… 舞も、気をつけて」

《うん……》

誰が、何のためにわざわざ本と同じ方法で不動とマックスを傷つけたのか—— 海音は、唇を強く噛んだ。

「—— 今から、舞のところに行くよ。舞は、私が守るから」

誰にも舞を傷つけさせたりはしない。海音は拳を握りしめた。

+++

「海音……」

海音はまだ気付いていない。彼女が本の内容を具現化したのだということを。以前なら、すぐに気付いてルチフェルを呼び寄せたのだが——

「ルチフェル様…… どういたしますか？」

ユリウスが心配そうにルチフェルを見つめた。しかし事情を知らないフィーは、ルチフェルの左腕を抱きながら頬を膨らませる。

「またこの子見てるんですかぁ？ ルチフェルの浮気者お！ ……」
…です？」

「—— ユリウス。実際この麻樟まぐすを殺した人間は、不動なんだろう？ その場合神は不動をどう裁くのだろうな？」

フィーを無視してルチフェルが問う。ユリウスは首を振った。

「あの方のことは理解できません。何故こんな遊びをするのかも…」

「まあ、人の魂を糧にする悪魔が『人を駒にするな』とは言えないが……」

「駒にされたら困りますよ！ 精気美味しいかもしれないじゃないですかぁ！」

フィーの言葉にはつとめる。そうだ。人間がいなくなつて困るの

は、どちらかといえば悪魔側だ。だからこそ基本的に悪魔は人間を守ろうとする。それがたとえ食べるためであつてもだ。

「——フィーなら、私と違って楽に人間界に行けるな」

ルチフェルやユリウスと違い、フィーは純粋な魔族であるが故に制約があまりない。ルチフェルはフィーの紫色の髪を撫でた。

「神崎海音に、どうにかして召喚用の文章を読ませろ。出来るな？」

「わかりましたあ、ルチフェル様！」

フィーは強く頷いた。純粋な魔族は本来、神のような——善性のあることをすれば、階級を剥奪される。皮肉なことに、ここにも神の規律があるのだ。だが『餌を守る』という大義名分があれば問題はない。フィーには何の影響もないのだ。

「ちゃんと出来たら遊んでやるからな、フィー」

「約束だよ！ 破ったら精気いっぱい吸っちゃうますからねっ！」

フィーはルチフェルを指差しながら叫び、姿を消した。ルチフェルは呆れたように溜息をつく。

「海音のこともそうだが……フィーのあの妙な言葉遣いはどうにかならないものか。丁寧語を使おうとしているのはわかるが……」

フィーの方は根気強い教育が必要なようだ。だが、彼女の言葉が道を開いたのもまた事実だ。褒美をやらなければならぬ、とルチフェルは呟き、黒いコートを羽織った。いつでも海音のところにに行けるように、準備をしたのだ。

+++

「舞！」

「海ちゃん……っ！」

飛びついてくる舞を、海音はしっかりと抱きしめた。どこに行けば安全なのか——海音は泣きじゃくる舞を抱きしめながら、頭をフル回転させた。

『鬼神の瞳』で、部長が被害に遭うのは三番目だ。しかし発見が

早かったために助かるということになっている。

三つ、蜜塗り朝待てば

蜜柑が揺れてる、おろしましょ

「蜜柑の木がないところ……って結構あるわね」

学校は童歌の条件が全て揃うから、一番危険だ。それならなるべく学校から離れればいい。

「舞、スタバでも行こうか？」

「うん……」

舞は自分が次に狙われることよりも、マックスの死の方がよほど堪^{こた}えているようだ。舞はそういう人間であることは知っているし、だから友人でいたいと思っている。だからこそ、舞は自分が守らなければ。本の内容を自分ほど忠実に暗記している人間はいない。舞でさえ、『経口補水塩』が何なのかを覚えていなかったのだ。本来それは部長の台詞だったのだが。

出来るだけ本の中に書かれている行動と、違う行動をとる。そうすればトリックは成立しない。海音は本の内容を細かに思い出しながら、舞の手を引いて歩いた。

「海ちゃん……」

「どうしたの？」

「……海ちゃんは、強いね……私なんか、本の中の部長はしっかりしてたのに……不動に何も出来なくて……」

「私は台詞を喋っただけだよ。舞の方が……私には、演劇なんか出来ない」

出来るのは読むことだけだ。書くことは好きだが、それを生業にするつもりはない。要するに中途半端なのだ。でもせめて、本に籠り心を閉ざしていた自分に、諦める事なく話しかけてくれた舞を守りたい。海音は強く心に誓った。

「海ちゃん、大好き！」

「……何よ、藪から棒に」

呆れて溜息をつきながらも、道の途中で抱きついて来た舞を振り払うことはしない。舞に抱きつかれるのは嫌いではなかったのだ。

——しかし闇の中から響いて来た声に、海音たちは体を強張らせた。

「ラブラブですね、先輩方。中山可穂の世界ですか？」

「不動……どうして……」

いるはずはない。彼は入院しているはずなのだ。鬼の面をつけていることといい、まるで小説の中の人物だ。海音の声は自然と震える。

「どうして……」

「だって神崎先輩が言ったんですよ。『一人目にする』って。なのに自分で話を変えようとするんだもんなあ……これじゃあ神様も大変ですよ」

「何を、言ってるの……？」

「先輩が現実にしたんですよ、本の中の陰惨な世界を。忘れているかもしれないけれど、先輩にはそういう力があるんですよ。まあ、神様の力なんですけどね」

意味がわからなかった。不動の言葉を信じるなら、この状況は自分が作り出したことになる。

「『初めに言葉ありき』って言いますよね？　つまるところ神様っていうのは言葉なんです。神が『光、あれ』と言ったら光が出来る……先輩の力はその劣化版です。読んだものを具現化出来る。

そして先輩は『鬼神の瞳』を具現化してしまった。運命は変わって僕は人殺しになり、麻樟は死んだ。……そういうわけですから、部長を渡してください。大丈夫ですよ……死にはしませんから。副部長が見つけてくれます。その副部長もあとで僕が殺しますけどね」

海音は舞をきつく抱きしめた。不動の目は、校門で会ったときと

は全く変わってしまったている。人殺しの、鬼神の瞳だ。渡してはいけない。ここで止めなければ、歌が終わるまで不動は止まらない。

「ど……して……不動……っ！」

「昔、先輩達が僕の母を殺したんですよ。といつても、神崎先輩が本を読むまでは健在でしたけどね。先輩の力は過去さえ捻曲げられる。ただ先輩は本の人物にあてはまる人がいないので、少々部長に關しては設定がずれてしまって、不完全な具現化になりましたけど」

「じゃあ何故、運命を捻曲げた私を殺さないんだ！ 私が変えたのなら、舞は私が本を読むまで人を殺したわけじゃないんでしょ？」

「それは神の意志に反するので、出来ないようになってるんですよ。だから早く僕をこの運命から解放してください、先輩。もうこんな悲惨な劇はやりたくないんですよ」

わからない。『神の意志』——神が人殺しを望むはずはない。それに完全に自分が運命を捻曲げたなら、不動がここまで真実を知っているのはおかしい。海音が反論しようとする、舞が泣きじゃくりながら言った。

「……あれは、事故だったのよ……でもまさか貴方のお母さんだったなんて……」

「部長、悪いんですけど……その台詞は結末にお願いします。これ以上台本からずれると、神様でも収拾がつかなくなりますから」

舞の言葉は嘘とは思えない。これが過去を捻曲げたということなのか。しかし——

「……何故、お前は全てを知ってるんだ？」

「部長が脚本にないことをしたからです。神から全てを教えられました。さすがに地上での力は先輩に勝てないみたいです」

「何で……それに従った？」

「従わなければ、従うまで物語は終わらないからです。早く終わらせたいんで、力づくでいかせてもらいますよ」

不動は懷からナイフを出し、海音達に向かって来た。応戦しなければ——そう思った瞬間に、不動の動きが不自然に止まった。

「お取り込み中悪いんだけどお、フィーはその海音って人間に用があるの」

不動の体には紫色の髪が巻きついていて。海音と舞はその髪を持ち主——フィーを目を丸くして見つめた。見た目は十歳かそこらの娘に、不動は冷たく凍えた声で言う。

「下級魔族風情が……邪魔をするな」

「なあによ、人間のくせに。フィーは淫魔なんだからね!」

フィーが叫んだ瞬間、紫色の髪の毛の先が不動の体と同化した。不動の表情が凍りつく。

「……ッ……精気が……ッ!」

「しばらく黙っててね、フドークン。……で、海音はつべこべ言わずにこれを読みなさいよ」

海音はフィーが差し出した紙を、反射的に受け取った。そして言われるがままにそれを読み始める。書かれていたのは、何かを召喚する方法だ。聖遺物……魔法円……穢れた体……命令を聞かせるために、魔三角の中に固定……一度読み始めると、止まりはしない。舞が海音に声をかけるが、それも聞こえていないようだった。

最後のフレーズに到達した時、不意に不動の体から光が放たれた。

「《邪魔は、許さない》」

「きゃあっ!」

声が二重に聞こえたと思った瞬間、フィーの体は吹き飛ばされた。そして不動は海音から紙を奪おうとする。

——しかし、海音の方が早かった。

風が変わり、闇が深さを増す。その刹那に、金色の髪と黒い羽根を持った男が海音と不動の間に立った。

「ルチフェル様あ」

「フィー、その舞という女を安全な場所へ」

「了解しましたですう!」

フィーは敬礼をしてから、舞の手を引いた。安全な場所に誘導してくれそうには見えないが、舞はフィーの強引さに負けて海音達から離れていく。それを確認してから、ルチフェルは不動を見た。

「フィーの奴、派手に精気を吸ったみたいだな。まあこの程度ならすぐ回復するだろう」

「貴方は……？」

「私はルチフェル。簡単に言えば悪魔の元締めだ。神崎海音よ、お前の望みは何だ？」

「望み……？」

ルチフェルは気配だけで不動を牽制している。その冷たい鈍色の瞳は、底が見えないがどこか蠱惑的だった。望みが心から滑り降りるように出て来てしまう。

「私は……」

《惑わされてはならぬ、海音よ》

願いを言おうとした瞬間に、体を灼熱が貫いた。コンクリートの地面に膝をつく。

《惑わされてはならない》

《お前は私を信じればいい》

《私の大切な、愛しい娘——》

言葉が意識を侵蝕していく。『神というのは言葉』——不動の台詞を微かに思い出す。

「……っ……貴方は、間違ってる……っ！ 運命を捻曲げられて人を殺すなんて、絶対におかしい……っ！」

海音は必死に神に反抗する。しかしその瞬間、海音の体を雷撃が貫いた。

「いやあああっ！」

「海音！」

ルチフェルに抱きかかえられる。しかしその間も苦痛は続く。

「くうっ……っ！」

「——これが自分の子供にする仕打ちか!？」

「《間違った道を選んだ子供をしつけるのは当然のことだ》」

不動の口を借りて神は言い、ルチフェルに雷撃を放った。しかしルチフェルは翼を一度動かしただけでそれを無効化する。

「ルチフェル……」

その漆黒よりもなお黒い羽根には見覚えがある。少し前から、自分が乗にしていた羽根だ——そう思った途端に、頭に激痛が走る。

「いつっ……!」

「——綻びが出始めたな。これなら私でも壊せる」

ルチフェルの手が額に触れる。その手の冷たさを知覚すると同時に

——海音は全てを思い出した。体を支配した甘い熱さえも、鮮明に。

——にやり、と海音は笑った。

「——さっさと何とかしなさいよ、悪魔」

「正確には墮天使だ」

海音と同じ色の笑みを浮かべて、ルチフェルは笑う。そして左手から漆黒に光る剣を取り出した。

「《私を殺すつもりか?》」

「それは無理だな。ただ、帰ってもらうだけさ」

ルチフェルは不動に切り掛かる。その動きは風のように疾い^{はや}が、不動は指を鳴らすだけでルチフェルの動きを止める。羽根を動かして無効化しようとするが、羽根にすら神の力は巻きついて動かせない。

「《口ほどにもないな》」

「ぐっ……あ……あああっ！」

ルチフェルの体がミシミシと音を立てながら変形する。神の力は圧倒的で、海音はそのことに戦慄を覚えた。所詮自分は神の駒なのだ——逆らえはしない。そんな思考に満たされる。

「ルチフェル……」

「……う、みね……っ……お前は、読めば……いいんだ……現実を守るために……！」

「現実を守るために……？」

だが自分の力は現実を捻曲げる力だ。現実を守ることなど出来ない。どうすればいい——海音が途方に暮れかけたとき、ポケットの中で携帯が鳴った。着信音が一人だけ違うからわかる。舞からのメール——そうだ、メールだ。

「《何を……？》」

海音は目にも留まらぬ速さでメールを打ち始めた。それを阻止するように、海音に雷撃が放たれる。しかしルチフェルが動けない体を無理に動かし、それから海音を庇う。

「ルチフェル！」

「私のことは気にするな……っ！早く！」

海音は頷いて自分が打ち込んだ文章を読み、同時に舞に送信する。

その瞬間、不動の目——神の目が見開かれた。

「《海音……！何ということをして！》」

「舞は部員みんなのことを大切に思ってる。それが上に立つものには必要だと思う」

ルチフェルがそれでいい、と言うように笑った。同時に不動が地面に崩れ落ち、ルチフェルの苦痛が和らぐ。

それを——神がいなくなったことを確認し、海音はほっと息を吐き出した。

「一体、何を讀んだんだ？」

「『昨日と今日のことは全部夢だから大丈夫だよ』って。夢才チは

もう、古すぎてあまり使わないパターンだけだね」

「——それなら、あの麻樟とかいう人間を生き返らせる手間も省けたな」

アイツ、麻樟という名前だったのか——海音はそう思った。

麻樟をマックスにしてみようあたりは、実に舞らしい。

「不動は大丈夫なのか？」

「全部夢だったということになってるさ。影響を受けないのは海音と契約を結んだ私と、お前だけ。後はありとあらゆる全ての人間が、昨日と今日を夢だと認識した。お前が人を絞らなかったからな。だから麻樟が生き返ったことを不思議に思う人間はいないだろう」

そうか、と海音は疲れたように呟いた。

「——私は、いつまでこの力で世界を変え続ければいいんだろうな……『力を失う』ことだけはどやっても具現化出来ないし」

ルチフェルを思い出すと同時に、力の全てを知った。ルチフェルが前に来た時にはそれを知らなかったから、前よりは進んだのだろう。

「——嫌なら、魔道に堕ちればいい。死後に救われることはないが」

「魔道ね……私がその道を行けば、他の人間に影響はある？」

「いや、ないな。要するに私と仲間の契りを結ぶだけの話だ」

「それなら……私は、魔道に堕ちるよ。それでこの力はなくなるんでしょう？」

そう海音が言った瞬間に、唇に冷たいものが当たった。体に蘇った熱を呼び覚ます、短いキスだ。

「神の加護から外れることになるから、代わりに不幸になる可能性もあるがな」

「そのときは何とかしてよ」

「出来る範囲でな。残念ながら私は万能ではない」

小さな笑顔が交わる。魔道に堕ちるのはとてもたやすく——

痛みも何もなかった。そしてこれから何があるうとも、この道を行くと海音は決めた。

どちらともなく唇を合わせる。熱が全てを凌駕していた。

+++

「やっぱり海ちゃんすごいねえ……結末全然違うけど、文化祭だからこのくらいの方がいいかも」

「そう？　かなりご都合主義だけど」

「その辺はほら、演技でカバーよ！」

書き上げた脚本を海音はパラパラとめくった。フィーには散々ご都合主義だと言われたが、舞がいいなら構わないのだ。せめて舞台の上だけでもハッピーエンドで終わらせたい。そう思って全員殺さなかったのだ。

「全員運よく助かる……じゃ流石にあれだけど、結局犯人が非情になりきれなくて綱渡りのトリックを使ってしまつて失敗するっていうのがね。こつち側の仲間割れで殴られる人もいるわけだし。伯父さんも褒めてたよ」

「不動はどう？　演技の方は」

「何て言うか……マックスを殺す夢を見たらしくて、それを参考にやつてみたいけど、かなりいいわよ。早く終わらせたい感じは演技じゃなさそうだけど」

神の駒として動いていた不動を思い出す。海音は全てを夢にしたが、不動がマックスを殺した事実は消えはしない。それが彼に傷を残さないかが気掛かりだった。

「よっぽどリアルだったのかなあ、その夢……」

「夢は夢だよ。気にすることはない……って言っておいて」

本当のことは自分が知っていればいい。海音は右手首に刻まれた墮天の印をなぞりながら思った。

+++

「海音は甘いですねえ、ルチフェル様？ あの脚本もそうですしい」

「一応まだ人間の範疇だし、そんなものだよ。……それより、ようやく丁寧語が使えるようになったみたいだな」

「海音に教えてもらったんです。でもルチフェル様以外には使いません」

フィーはルチフェルに後ろから抱きついて笑った。それを見ていたユリウスがフィーをからかう。

「とか言いながら、最近あの不動という人間の精気を吸いに行つてますよね？」

「本命はルチフェル様だもん。不動はアイジンよ、アイジン」

氣が多いのは淫魔の性だが、フィーはどうやら面食いのようだ。精気を吸われ続ける不動のことをユリウスとルチフェルは憂えた。

「あー、でも麻痺みたいなタイプもいいかもあ」

「結局男なら誰でもいいんじゃないか……？」

「ユリウスは生理的に受け付けない」

「……あ、そう」

ユリウスとフィーの会話を聞きながら、ルチフェルは鏡越しに人間界を見ていた。

神がこれで全てを終わらせるとは思えない。それでも、もう海音は大丈夫だろうと——そう思えた。

「人間とは、神よりも時には偉大な存在かもしれないな」

本来何にも縛られず、聖にも悪にもなる自由な存在。だからこそ、時に神や悪魔を凌駕することが出来るのだ。

「人間の精気は美味しいですもんねえ、ルチフェル様！」

「精気を餌にするのは淫魔だけだな……」

「ユリウスは黙っててよ！」

穏やかな日常は確かにつまらないかもしれないけれど、それが一番幸せなのだ。実際のところ、人間が一番それを知っているのかもしれない。

——いつか神も知ればいい。

ルチフェルはそう思って、機械のような鈍色の目を細めた。

（後書き）

2日で書きました！（10日に間に合わせたかったです）

新キャラが続々出てきましたが、まあバッドエンドよりはいいかな
と思いついて……海音編はここで終わりますが、もしかしたら神と
のバトルの話を書くかも……その前に連載の第三部を書かなきゃで
すが。

フィーちゃんが個人的にはお気に入り。あと不動君も好きです。

この企画は楽しかったので、またやりたいなあ……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9042f/>

遊戯(ゲーム)の終わり

2010年10月8日15時21分発行